
小鳥のように β version

檀 敬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小鳥のように β v e r s i o n

【Nコード】

N5010S

【作者名】

檀 敬

【あらすじ】

高校の時に、天使のようなフルートを吹く女の子がいた。だけど、僕にとって彼女は「高嶺の花」だった。

ある日、会社の同僚に誘われた合コンで彼女と出逢ったのだった。高校の時の華やかさとは違って普通のOLになっていた。

合コンで再会してから、急速に僕に接近しようとする彼女と僕の想い出とに葛藤しながら、僕は彼女のフルートを聴くことに……。

ハイトーンな楽器の音が聞こえる。

鳥がさえずるような音。

軽やかで煌びやかな音だけど、しっかりした音量と豊かな倍音を奏でている。

時に激しく、優しく、妖しく、そして艶やかに。

この音、この音色、この旋律、この調べは、彼女から聞こえてくる。

彼女が演奏するのはフルートだ。

彼女の息使いは、まさに天使のささやきだ。

僕は魅入られたようにうっとり聞き入ってしまう。

フルートを吹いている時の彼女は、まるで天使が舞い降りているかのようだ。

一瞬の瞬きさえ出来ないほど、僕は彼女を見入ってしまう。

僕はそれ程にフルートを吹いている時の彼女が好きだった。

しかし、これは僕の一方的な想いだった。

そう、片思いだと言ってよかった。

フルートを吹かない時の彼女に僕は何の魅力も感じていなかった。確かに美人ではあったが、高慢で高圧的、優越感の塊のような女だった。

彼女の周りはいつも華やかで、いつも取り巻きが囲んでいた。

さえない僕なんかは相手にされるところか、話したことも目が合ったことすらなかった。

だが、僕はそれでよかった。

ぼくの「片思い」は、それで十分だったのだ。

僕の中で、さえなかった高校時代の、唯一の淡い青春の思い出で

ありさえすれば。

彼女と再会したのは、会社の同僚が誘ってくれた合コンでのことだった。

図らずも彼女は僕の目の前の席だった。

だが、僕はそれが、フルートの彼女だということに全く気付けなかった。

彼女の佇まいが高校生の時と全然違っていたからだ。

ツンと澄まして、お高く留まっていた彼女の印象は欠片も無かった。

そして、あろうことか、僕は最初の自己紹介でもそれに気が付かなかったのだ。

確かに名前を聞いた瞬間に、微かな心の振れはあったのだが。

「へえ、同姓同名って居るもんだなあ」

僕の感想はそんなことだったのだ。

フリートークが始まると、彼女は妙に僕に話し掛けてくるのだった。

僕は他の女の子とも話をしながらも、次第に彼女との会話率が増えていかざるを得なかった。

そして、更に彼女は大学の話ではなく、高校の話に仕向けるのだった。

ここで初めて、僕と彼女が同じ高校だったことを僕が知ることになった。

僕は驚いたのだが、考えてみればそれは当然のことだったのだ。

そしていろいろと高校時代のことを話しているうちに、音楽の話になった。

僕はまさか本人の前だとは思ってないから、例の話をしたのだ。

高校の時に天使のようなフルートを吹く女の子がいて、僕の憧れだったことを。

僕のその話を聞いて、彼女は急にうつむいた。
そして、ハンカチを取り出して目頭に当てた。
どうやら涙を流した様子だった。

「どうしたの？」

そう訊ねた僕に、彼女は嗚咽をしながら答えた。

「憶えててくれたのね」

僕はハッとした。

「それ、あたしのことよ」

彼女にそう言われて、僕は今までの話の流れに合点がいった。

僕は、全く信じられなかった。

いや、信じろというのが無理なくらいの僕の気持ちだった。

高校時代の、取り巻きの中心に居て、いつも華やかだった、あの彼女が目の前にいる。

フルートを吹くとまるで天使のようだった、あの彼女が！

それが、だ。

今は取り巻きも居ない、誰もチャホヤしない、たった一輪の花になっていたのだ。

しかも、とても一流とは言えない、中小企業の会社のしがないOLをしているのだ。

僕は驚いたというより、軽いショックを感じていた。

それだけならまだしも、彼女は僕に、更にショッキングな事実を吐露したのだ。

「あたし、高校の時から、貴方のことを知ってたわ」

彼女は伏せ目がちにそう言った。

「フルートを演奏していると、必ず聴いてくれてた貴方を、ね」

僕は開いた口が塞がらないでいた。

「それも、会場の目立たないところでいつも聴いていてくれてたわよね」

彼女の頬が少し赤くなった気がした。

「あたし、それが支えだったの、貴方の存在がね」

僕は、彼女の言葉に全身に電気が走っていた。

だけど、僕にとっては過去のことだ。

そう遠くもない過去のことだが、僕にとっては既に「思い出」なのだ。

美しく形骸化した思い出を今更、蒸し返して欲しくなかった。

『フルートを吹く美しい彼女の音色』

僕はそんな思い出のまままでよかったのに。

だが、今この場所は合コンの場だ。

しかも、既に二次会のショットバーへと雪崩れ込んでいた。

他のメンバーは既に適当なカップルになってチリジリになっていた。

残されたのは僕と彼女だけで、カウンターに並んで座っていた。

「今日は、ありがとう」

彼女はそう言って、僕に頭を下げた。

僕は、やり場のない、複雑な想いを抱えながら頷いただけだった。

「もし良かったらでいいんだけど、連絡先を教えてほしいのだけど

……」

彼女は凄く遠慮がちに、けどある種の決意を持って僕にそう切り出してきた。

僕に断る理由が無かった。

いや、断る理由を考える余裕さえも無くなっていたのだ。

僕は無意識のままに、彼女と携帯電話のメールアドレスを交換していた。

そしてその日、そのショットバーの出口で、彼女に軽く手を振って別れたのだった。

『僕はあの時、軽い熱に冒されていたんだろう』

翌日の朝、起きた時に僕はそう思うことにした。

それでも、僕の中の想い出と想い出に隠されていた事実とに、僕の心は捻られていた。

僕は十分に揺すぶられていて、何かをまとも考えられる状態ではなかった。

この心境から逃げ出したかった。

そして、心の安定を図りたかった。

だから、僕は仕事に埋没することにした。

毎日の激しい仕事に身を置いたのだが、僕は彼女のことを本当に忘れることが出来なかった。

それというのも、彼女は一日一回、それも必ず午後十時キツカリに、僕の携帯電話にメールを送ってきたのだ。

？昨日はありがとう。楽しかったわ？

？今度、逢えないですか？

？貴方と話がしたいです？

？逢いたいです？

？迷惑じゃないですか？

そんなメールが一ヶ月の間、僕の携帯電話に届いていたが、僕は返信することをためらっていた。

すると、遂にこんなメールが送られていた。

？ごめんなさい？

それから、彼女からのメールが来なくなった。

僕は、ホッとしたような、ちょっと残念なような、更に複雑な心境に陥っていた。

彼女からのメールが来なくなって一ヶ月後に突然、彼女からのメールが一通、僕の携帯電話に届いた。

？貴方の前でフルートを吹きたいです？

僕は自分でも気付かないうちに、自然にメールを打っていた。

？フルートを聞かせてください？と。

それに気付いたのは『送信』のボタンを押した後だった。

彼女からの返信は、実に早かった。

僕が送信ボタンを押した直後の、微妙な後悔をしていた時に着信音が鳴ったのだから。

彼女のメールの内容はこうだった。

？ありがとう。とっても嬉しい？

その後すぐに彼女は、日時と某楽器店のスタジオを連絡してきたのだった。

僕は、馴染みなんて全くない某楽器店におずおずと入店した。

物珍しそうにキョロキョロしている挙動不審な僕に、楽器店の店員が声を掛けてきた。

「いらっしやいませ。何をお探しでしょう？」

僕はしどろもどろになりながら、慣れていない口ぶりで店員に尋ねた。

「ああ、それなら二階に上がって突き当たりのスタジオです」

店員はそう言って、僕に階段を指し示してくれた。

僕は階段を昇っていくと、教えられたスタジオの防音扉の前に彼女が待っていた。

そして、彼女は深々と頭を下げた後、こう言った。

「来てくれてありがとう」

僕は、自分が場違いな感じがして、首振り人形のように頷いただけだった。

彼女は防音扉を開けて、僕を手招きしてくれた。

僕は彼女の指示のままにスタジオに入った。

スタジオには椅子が一つ置かれていて、その三メートル先に譜面台が置かれていた。

「ここに座って」

彼女は、スタジオに置かれたたった一つの椅子を示した。

僕は少々居心地の悪さを感じながらも、椅子に座った。

彼女は、譜面台の横にあるテーブルに置かれたフルートを手に取った。

そして僕に向き直ると、もう一度深々と頭を下げてからフルートを構えた。

『メヌエット「アルルの女」』

『ハンガリー田園幻想曲 第1楽章』

『シチリアーノ』

『ヴェニスへの謝肉祭』

『亡き王女のためのパヴァーヌ』

『マドリガル』

彼女は、この六曲を聴かせてくれた。

高校生だったあの頃と、少しも変わっていない音色。

そして、天使のように感じていた調べも全然変わっていなかった。小鳥のようにさえざる旋律は変わらないが、多少艶のある感じになっっているような気がした。

僕は、久しぶりにうっとり彼女のフルートを聴いた。

僕の心の中にあった、想い出と事実の『わだかまり』は胡散霧消した。

僕はひよっとして、勘違いをしていたのかもしれない。

本当の彼女は、こうだったのかもしれない。

いやいや、現実には彼女はこうなんだと僕の前で表現してるじゃないか。

僕は、申し訳ない気持ちで居たたまれなくなった。

でも、それは現在進行形で変えられる項目なんだろう、きっと。

僕の想い出は今も進行中でいいんじゃないのか。

僕は自分でも分かるほど幸せな顔で、彼女の演奏に聞き入っている。

た。

演奏し終わった彼女は、深々と頭を下げた。
そして僕に言った。

「あたし、誰かの為に演奏したのは初めてよ」
そう言って、頬を赤くした。

「それが貴方だったことが嬉しいの」

彼女はそう言うのと、僕に背を向けてしまった。

僕は、立ち上がって彼女に歩み寄った。

そしてこう言った。

「素敵な演奏だったよ。あの頃と同じ、いや、あの頃よりも……」

僕の言葉に、彼女は僕の方を向き直った。

「ホントに？」

ぼくはゆっくりと、そして大きく頷いた。

彼女は頬を真っ赤にしながらも、彼女の出来る限りの笑顔を僕に
向けてくれた。

「また、聴かせてくれる？」

僕がそう訊ねると、彼女は微笑んで言った。

「ええ、もちろん」

僕は、フルートを演奏する時の彼女だけでなく、彼女の全てが好き
になったようだった。

(後書き)

僕の開設しているWEBサイトのほとんどにアップさせてある「小鳥のように」の改稿版です。

「やっぱり『なろう』にはそれなりのモノをアップしないとね」なんて思ったので？β version？としてみました。

？aversion？と読み比べてみると、面白いかもしれませんよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5010s/>

小鳥のように β version

2011年4月16日02時55分発行